

## 前田利常公の通信簿

磯田道史著「殿様の通信簿」を抄録する。

埼玉福祉会発行大活字本シリーズ（上、下）（底本：朝日新聞社刊『殿様の通信簿』）

江戸時代 260 年間に全国で約 3,000 人の大名がいたと言われる。その中から本書では、7大名の事績について取り上げられている。前田家では初代利家公と加賀藩第3代藩主利常公が取り上げられている。利常公はエピソードの多い殿様だった様で、本書の約3分の1の頁が割かれている。

徳川幕府が約300年続いたのは、前田が徳川に背かなかったからである。徳川家康が死んだとき、謀反を起こしそうな大名が3人いた。金沢の前田利常、熊本の加藤忠広、広島の前田正則である。家康は関ヶ原で勝ち組に入れた豊臣恩顧の大名が危ないと考えていた様だ。

家康は死の床へこの3人を順次呼んだ。前田利常には「お前を殺そうと思ったが、秀忠が助命嘆願したので止めた。秀忠の恩は大きい、何があっても謀反などしてはならぬ」と申し渡した。前田正則には「関ヶ原では良くやってくれた。但しお礼は十分にやってやった。」（借りはないぞ）と言った。前田家は後に改易されている。

前田家では「家康公は、前田は助けることにしたと仰せられた」と家康公の遺言を世間に吹聴した。幕府では家康公の遺言なら前田は潰せないと言うことになった。江戸初期のパワーバランスで綱渡りをやり、徳川の平和な枠組みを作ったのは前田利常だ。

### 出生について

利常は利家の胤ではあったが、母の身分があまりにも低く、加賀120万石の太守になるとは誰も思っていなかった。

天正20(1592)年豊臣秀吉は朝鮮出兵をはかり、九州肥前名護屋に築城し武将を集めた。そこで秀吉は「陣中ではさぞ不自由であろう、此処で洗濯女を雇うように。国元から下女を呼び寄せるとも勝手次第」「本妻が嫉妬深いなら本妻を呼び寄せても良い」との命を下した。

利家の本妻「まつ」は九州へ行く者を募ったが「まつ」の嫉妬を恐れ誰も申出る者がなかった時、下女の「ちよ」が申出て九州へ下った。「ちよ」は名護屋の陣中で身ごもり、金沢へ戻され利常を生んだ。利家には沢山の子がいたので注目されずに育った。

### 成長期

その後利常は越中の前田対馬に預けられた。この頃利常は「お猿」と呼ばれていた。6歳になった時父の利家が会いたいと言ってきて対面した。利家はこの時利常の体格に注目し、抱きついて利常の体に触り体格、肉付きを確かめた。

その1年後利家は死に、長兄の利長が継いだ。利長は、頭は良くなかったが、物事を見抜く力があつた。関ヶ原の折、西軍の石田三成から、味方すれば北陸7カ国を進上するとの誘いがあつたが応じなかつた。すでに母の「まつ」を人質に出しており家康と争わぬ事を明らかにしていた。

利長の考えは「三州割拠」(①中央での政権争いには加わらない、②加賀、越中、能登の三カ国に立て籠もり時を待つ、③中央での政権争いで覇者が疲れたときに出て漁夫の利を狙う。)で、これが明治維新に至るまでの前田家の外交方針になる。

関ヶ原の折、南下はするが福井で小さな勝利をすると金沢に引き返し、また出て南下し関ヶ原の混乱に乗じて領地拡大を図り、実質的中立を通した。

関ヶ原の戦いで利常は「人質」(証人)という重大な役割を演じた。関ヶ原に向かう途中小松で豊臣方の丹羽長重と戦つたが、徳川大勝利の報で丹羽は徳川家康の陣に向かう約束をし、お互い人質を交換する事になりお猿(利常)は人質に遣わされた。

関ヶ原の戦勝祝いの能の席で利長に会い、体格の良いことから利長に認められた。利長は子がなかつたので世子を選ぶにあたり、兄弟の中で体格の良い利常を養子とし前田家世子とした。

### 前田家当主へ

家康の最後の悲願は豊臣家を滅ぼすことだつた。その工夫として前田家の協力または局外中立が必要だつた。関ヶ原の時、利長が生きて居る内は秀頼に手を出さない約束をしていたので、徳川と前田のパワーバランスゲームの落としどころは利家の隠居しかなかった。この徳川と前田の政治取引の結果13歳の利常が前田家の当主にされた。

利常8歳の時家康は秀忠の娘珠姫(2歳)を嫁に遣わすと約束し、翌年9歳と3歳の夫婦が出来た。慶長10(1605)年13歳の利常は利長と共に家康の前に出仕した。家康はこの子の目はただ者ではないと評し、利常に松平姓を与えた。(この頃前田家は秀吉から与えられた羽柴姓を名乗っていた)

家康は「前田家は徳川方」と世間に言いふらした。利長は豊臣家滅亡に巻き込まれないため、自分を消し去る事にし、富山の高岡城に引きこもり、自分の病状を徳川に知らせていた。また、病床にあって家康の側近本多正純の弟政重を家老に迎える話を受入れた。利長は親徳川路線を明確にしたのである。

徳川と豊臣の戦いが迫つた時、利長は秀頼の使者に対し、息子は徳川の婿であり考えは分からない、自分の軍勢(高岡城)だけは豊臣方に差し上げると言つた。家中が敵味方に分かれて戦わなければならなくなつた時、利長がコロリと死んだ。利長公が自身で毒を飲まれたと言うことが公然の秘密となり、前田家は徳川方の豊臣攻めに加わること

が出来た。(利家としては、早く自分を消さなければお家の安泰は保てないと考えた)

利長の死を聴いて、家康は豊臣攻めの準備を始めた。前田家は冬と夏の二度の陣に参戦でき、徳川政権下で生き延びる道が開けた。

秀頼公切腹の報で各陣所が浮き立った時、伊達陣から鉄砲の音が鳴り響き、すわ謀反と浮き足だったが、23歳の利常は見事に自陣を落ち着かせ、戦場における「将才」を世間に認めさせた。

大坂の陣で利常は家康から「感状」を貰った。徳川家のために命がけの「奉公」をつくした証拠となる物で、これにより末永くご恩を被った。

大坂の陣が終わったとき、家康は利常に四国一円を与える条件で国替えを持ちかけた。120万石以上であるが利常は家康の申し出を断った。家康は京の地続きで或る北陸に前田がいることに耐えられなかったのだ。前田家には“いつか天下を”の思想があるため利常は動かなかった。ともあれ利常は大坂の陣でその天才性を見せた。

### 当主になって後のエピソード

前田家では本多政重が利常に毒を盛るという噂が絶えなかったが、これを耳にした利常は「何のために毒を盛るのだ、言いふらす者を成敗する」と言って取り合わなかった。しかし到来物の菓子などは決して食わず、家族にも厳しく申しつけていた。

利常は「大名の用心は食べ物のごとく、ことのほか大切である」と言い他所で食べた物は吐いていた。

かわや姥：前田家には「厠に入ると妖しげな姥が現れる。これは前田家の血を引く者にしか見えない」という怪談が伝わっている。これは利常の正室珠姫の付け人として徳川家から付いてきた珠姫の乳母の局の怨霊だという。徳川家から付いて来た者は隠密で家中のことをすべて徳川へ報告していた。利常と珠姫は仲が良かった。16歳で初産、24歳で死ぬまでに8人の子を産んだ。あまり仲が良いことは報告内容が筒抜けになる事で、隠密である乳母にとっては問題であった。珠姫は乳母から責められ、徳川と前田の板挟みとなっていた。ついには乳母に監禁され病気になった。利常は珠姫の病状を見て激怒した。利常はこの乳母を蛇責めにしようと準備していたが、乳母が自害した。それから、金沢城の厠の穴から姥の死霊が出てくるようになった。

徳川家光が「日本の諸侯はすべて徳川の法を基準に政治を行うべし」と命令を下したとき、前田利常と伊達政宗の二人だけは従わなかった。幕府から内藤外記が乗り込んできたとき「前田家は豊臣時代から、内府(家康)・大納言(利家)と車の両輪のように称されてきた。利家は早世し、家康公は長生きして天下をとられた。それで徳川家の下になったが、徳川家に取り立ててもらったわけではない」と言った。

利常の孫綱紀(第5代藩主)が5~6歳のころ江戸城に呼ばれ徳川家光の御前に出た

とき、家光は饅頭を与えようとした。綱紀が手を伸ばそうとした瞬間、小姓が「食べちゃダメ、大名というものは他所では物を食べないものだ」と大声で言った。利常が日ごろ口癖のように言っていることだった。やむなく家光は一口食べて綱紀に与えた。将軍に毒見をさせたのである。

利常は家光を馬鹿にし、しばしば不遜な態度をとった。

秀忠が病臥するや、金沢城で新たに侍を召し抱えはじめ、家来の俸禄を増やした。また、金沢城の堀を掘り直し石垣の普請を始めた。家光と幕閣は利常とその子光高を江戸に呼びつけた。利常は家老の本多と横山に申し開きをするか、籠城して戦うかと問うた。本多は籠城、横山は申し開きを薦めた。動員兵力は4万であり、豊臣が10万の兵力で潰されたことから、利常は「光高と二人で江戸へ行く。とがめはわしがうける。“老木をば捨てよじゃ”」と江戸へ行くことを決めた。

江戸へ着くとまた屋敷普請を始めた、江戸城から上使が来て「屋敷の留守居を登城させよ」と上意を伝えた。これで利常は徳川に戦意のないことを悟った。利常は家老横山に江戸城で申し開きをさせた。幕府が事なかれ主義で天下を安泰に保つことしか考えていないことを見抜いていた。

鼻毛伸ばし：利常は「鼻毛を長く伸ばし、わざと馬鹿殿様を演じ、幕府ににらまれないうようにしていた」と言われているが、事実は違う。利常は元々幕府ににらまれており、鼻毛を伸ばしたくらいではどうにもならないほど警戒されていた。「馬鹿将軍の江戸城へ行くのにわざわざ鼻毛など剃れるか」というのが本心だった。

「わしが馬鹿を世に知らせたからこそ、心安く3か国を保て、皆が楽しめるのじゃ」と言った。(本気になれば天下大乱になるという自負があった)

世子光高が東照宮を金沢城に勧請しようとしたとき、「いらざることをする、いつまで徳川の天下であろうか、後で取り壊すのが面倒だから、どこか遠くに建てよ」と吐き捨てるように言った。

### その他のエピソード

利常は“加賀だけは特別な家である”ことを世間に認めさせるためつまらないことでもやった。傍若無人は計算されたもので、処罰のギリギリを見極めてやった。できるところまでは抵抗し、思うままに振る舞う方針だった。

- 駕籠で登城するとき、駕籠から降りるよう制止されたが「かまわん」と押し通した。
- 江戸城中で「頭巾をかぶってはならぬ」と注意されると、わざと派手な紫頭巾をかぶって登城した。
- 尾張家に頭巾が許されると「自分も被る」と言ってきかず、ついに将軍から頭巾を賜った。

- 江戸城中に、小便禁止の立て札を見つけたとき、わざと立て札に向かって小便をかけた。そして「大名ほどの者が、黄金（罰金）惜しさにこらえがたき小便をこらえることはなかろう」と言った。

著者は、「利常ほどつかみ所のない大名はいない、ただひとつ確かなのは、利常は織田信長が始めた中世をぶち壊した狂気を受け継ぐ最後の大名であった」と言っている。

私は、昔の加賀藩領内で生まれたが、藩祖が前田利家であること、大河ドラマ「利家とまつ」で見たこと、殿様が鼻毛を伸ばし馬鹿殿を演じ幕府からにらまれないようにしていたと言う噂以外は殆ど知識がなかった。歴史家としてテレビ等で見る著者が古文献の資料を読み尽くして書かれた本書でエピソードを楽しく読ませて貰った。